

定部金貳錢 廣五號十二 休日曜大祭 福島縣石城郡平町町廿六番地
 一月二限リ 告字詰一行 刊列祝日ノ翌 印刷所 一〇活版所
 價一ヶ月廿錢 料五十錢 日刊 印刷所 一〇活版所

發行兼編輯人 川崎文治 福島縣石城郡平町字長橋町廿五番地
 印刷所 常盤毎日新聞社

刊夕日九十二月二

農村振興の實際方策を論ず (八) 不攀大岳人

素より國家は平等に此の恩典に與かるの制度を立て、居るであらう然し乍ら事實の之に伴はざるを如何せんやである

西歐の地にある、デンマルクの如きは世界有数の教育發達國であつて其教育機關の完備せる、或は中等高等教育程度の卒業人員の夥多なる眞に世界の模範とせねばならぬ、該國の人口百人に付八十五名の普通中等教育卒業業者あると云ふ統計を見る時我々は日本文明の前途未だに遠きを覺ゆるのである然も現今我國教育機關の一部地方にのみ偏して有爲の青年をして其修學を容易ならしむる策に出ない事は一面に於て地方青年の都會集中を助長せしむると共に又他面に於て農村青年子弟の郷土離散の原因を爲し且又農村頹廢の遠因を爲して居るのである、吾人は只に國家的立場よりのみならず地方農村の教育問題の上より立論して爲政者は須らく其教育機關を地方に分散する事に留意せられ、而して自由に普通中等教育を受

ける様にせられん事を提唱するものである、殊に近代世界の趨勢が平和の確立と共に軍備縮小に進みつゝあるのであるから、從來軍備に支出したる數億の歳出は大半之を國民教育の上に向けて教育に恵まれざる可憐なる彼等農村青年子弟の爲めに坐ながらにして中等高等の教育を受けしむる様に致し度いのである

學者は開口一番現代青年の地方自治精神の涵養を叫び愛郷心の足りない事を痛弊する、然し乍ら天性其教育に恵まれざる多くの青年子弟に果して自治精神の涵養を期待し愛郷心の發露を要求し得るであらうか。

常磐文藝
 雜詠集 (短歌)
 平澤雪哉

父飯る田舎道長く草枯れて
 寒き野山ぞ冬は眠れり
 風に吹かれて山路辿り來て
 梢を渡る鳥も悲しき
 寒き夜の炬燵に寝たる妹も
 覗く顔にぞ冬の静かさ
 子を連れて山家に戻る夕暮に
 陽を浴びて迎ゆる細道
 ふうなれと笑ひば笑ひ大方の
 春待鳥も目指す大空 (人生の成行)

× × ×
 雜詠集 (俳句)
 平澤雪哉

哀れなり秋蟬死んでキリギリス
 鷗飛ぶ波の静かや小春風
 月冴に誰にもやらず霜柱
 若武者の馬上ユタカや冬の雁
 鐘凍る町に一里村に二里
 犬吠ゆる里の埃や冬の月

◆ **毛糸** ◆
 經濟な御手編物は
 新時代の要求なり
 品質優等廉賣で誇るは
 弊店毛糸部の特徴
 今年の流行色を集めた
 弊店へ是非御用命を
 平町三丁目(電話三八番)

三井吳服店
 毛糸部

一冊の代金で
 御希望通りな
五冊の雜誌
 自由に讀める
 平町長橋町三五
川崎回文庫
 (申込次第規則書進呈)

貸地廣告
 平町舊城跡(本丸) 飲料水の便よく 住宅地に最も好適
 右御望みの坪數御貸申候間御來談願上候
加藤營業所
 平町字白銀町 電話乙三二番

外科……泌尿科
 皮膚病 梅毒科
 入院 隨意
阿部醫院
 平町字新川町 電話五六七番

二月二十九日より替り寫眞
 (續々名畫提供)
 現代劇松本泰輔歌川八重子共演
 純映畫慕ひ寄る魂 全五卷
 琵琶 大原錦陵

歐南バスクワリ映畫
 大活劇 **太平洋を越えて** 全五卷
 說明 藤原松雪

嵐璃徳劇(春日山)
史劇上杉謙信 全四卷
 大阪夏の陣
 舊劇 **阪崎出羽守** 全五卷
 嵐璃徳 實川延松 潮みどり共演

入場料
 全じ 者明說 酒丸山井 陸東洲 川上寅夫 西川寅夫 藤原松雪 關原松雪

帝國館 其他喜劇實寫

有給外務員募集
 ▲業務簡易月給五拾圓外手當歩合にて月收百圓以上
 ▲人員五六名廿歳より四拾歳位
 ▲御希望の方は履歷書持參の上大至急御來談あられんことを乞ふ
 平町田町六八
丸登株式店
 電話三三二二番

製材機械、人魚印丸鋸
 自動注油メタル、プーリー
 ゴムベルト、バラタベルト 在庫
 平町月見町
佐藤鐵工所
 電話三六二番

左記の値段は本日の標準値に付御用の節は御問合願候

錦	格拂込	時價
磐城銀行	五〇〇	五七〇
平銀行	五〇〇	七一〇
磐越銀行	一一五	一〇五
磐城實業	三〇〇	二八五
田村實業	一一五	一一五
四倉銀行	一七五	一七〇
農工銀行	二〇〇	二五五
同 新	一五〇	一九五
百七銀行	五〇〇	五五〇
同 新	一一五	一一五
七七銀行	一一五	九八
郡山電氣	五〇〇	三八〇
同 新	二五〇	一七五
只見川電	一一五	七五
植田水電	一一五	一五三
好問水電	一一五	一三五
磐城建物	一一五	五五
磐城製菓	二〇〇	六〇
平信託	五〇〇	三五〇
磐城勸業	一一五	一三五
植田物産	三〇〇	二八〇
平製水	二五〇	二七〇
好問軌道	五〇〇	三五〇
入山新	三二五	一七〇
小田炭礦	二五〇	一〇〇
磐城炭礦	五〇〇	四三〇
同 新	二二五	一九〇
磐城セメント	五〇〇	七五〇
同 新	一七五	三〇〇
平運送	一一五	八〇

東新株 先限 實物
 平町田町 電話三三二二番
丸登株式店
 川添房二郎

縣下各銀行は 飽迄協定率を尊重

協定破らるるの虚報に就て

本社は調査を進む

某新聞の報道に依れば縣下各銀行が預金利率を協定せらるに拘らず福島市に本店を有する某有力銀行の濱通りにある支店が恰も協定率以上の高率を以て盛んに預金を吸収しつゝあるかの如き報道をして居るので理論上其間不審に堪へざる筋がありその所謂某銀行は百七を指したるに非るかとの推測の下に本社は地方經濟界近來の大問題として調査するに某消息通は左の如く語る

需要激増に迫られ 九十萬噸出炭計劃

磐城炭礦の盛況

坑夫優遇の途を講ず

磐城炭礦では大正十三年九月拾萬噸の出炭計劃を立て着々事業の擴張を行ひ礦夫の募集を爲し來りつゝあつたが最近益々出炭激増の必要に迫られたものゝ如く來る三月中には一ヶ月九萬噸を採掘せんと意氣込んでゐる其の爲には從來行ふて來た福引抽籤賞典を廢して左の通り半月入坑賞典に改めた

十一日二圓 十二日五圓 十三日七圓 十四日五圓 十五日二圓

園藝大學終る

無欠席四百餘

石城郡の園藝大學は愈々廿九日横井博士の「經濟と園藝」講話終了後午後三時閉會式を舉行したが無欠席者總數四百五十名で聽講終了本日

一日中に 九千通話

平局の電話

平郵便局に於ける電話加入者は總計六百十三口に上つて居るが加入者の一日平均の通話度数は八千八百九十通話となり更に一月中の市外通話は急報五百六十通話普通三千五百廿六通話であつて一日平均約八百通話になる由

常磐線に大小數十個の 石を甘ヶ所に並べ

平驛迄の列車顛覆を企る 早くも發見停車

平驛着八一九號列車が廿八日午後二時十一分上野を發し荒川沖驛構内西方約百八十間の踏切線路上に差し懸つた際線路軌條の上に大小數十個の石を並べた

十個の石を二十餘ヶ所に併列し列車顛覆を圖らんとしたのを早くも發見五分餘停車之を取除き事なきを得た發達し得ない原因であると語つた

漁業が衰退

漁港完成して 反て漁船激減

石城郡小名濱港は經費百餘萬圓を投じ縣營漁港を修築し本年度にて竣成の豫定であるが小名濱町に於ける漁業は逐年衰退し當業者の疲弊甚だしく漁船は激減し打瀬船の如きも非常に減少して有る有様で漁港が完成して却て之を利用するもの少いと奇なる現象である、同町一有力家は小名濱町の漁夫連は漁業を副業とし従事するもの多く江名町の如く漁夫を勤めなければ

生活が 出来ないと

ふものがないから熱心が足りない、之が同町の漁業の智や理性だけではない、凡ての處女には特殊の第六感がある、或は之を處女感といつてもよからう、此の處女感によつて結婚の對手が擇まれ或は拒まれる、此の第六感が積極的に働きかける時に戀愛となる、一目見て戀を感じるなどは此の第六感の極鋭敏なる場合である、日本從來の結婚法に於

眞面目な 問題

場面によつては單に「スキャン」が結婚を成立せしむるやうなこともあり得やうが今後は女性の理智感情が此の問題に少からざる影響を與へるやうになるべきである、然し結婚を左右するものは決して慧

ては、結婚前に戀愛の暇がなく結婚後に於て此の第六感の働く餘地を發見する場合が少くない、即ち夫婦になつて後に始めて戀愛を感じ、若くは拒絶感を惹起する、正しく言へば其は適當な結婚でない、日本の從來のお見合結婚をなし得る人種は瞬間にして正しい戀を感得し得る程の敏感な第六感所有者でなければならぬ

珍聞奇聞

大はらの詐欺 元村井

銀行理事法學士田原章(三)は赤池警視總監の友人だとして豪語し株券を偽造し詐欺す

日本刀で惨殺 埼玉縣

大宮町坑元伊之三郎(三)は養家から離縁されたを憤り日本刀を振て一家四人慘殺

驛長其他居寢 兩毛線

思川驛にては驛長を初め驛員全部が居寢りし列車到着に氣がつかずググググ

藝妓に徴兵を 津村登

喜(二)は震災で鳥森から藝妓に出たが戸籍簿に登喜とあつたを男と間違へ徴兵

期成同盟會

發起人協議會

を開く

平町に運動場を開設すべきは既記の如くであるが是れが爲め平運動場新設期成同盟會を新設して事務所を磐

聯合品評會

を繼續

平役場の協議

過般平商業學校に開催されたる平町外神谷夏井平窪好問飯野内郷の六ヶ村聯合農産品評會の成績頗る優良であつたので是れを繼續すべく各村農會長は三月十日平町役場に會合協議する由

旅に泣く人

博多市在生れの 早登昇(三)は石

には死に別れ炭礦は追はれらるして故郷をさしての旅にいたが三日三夜飲まず食はずに歩き続け二十六日の灯さもし頃水郷土浦町にて行倒れてしまつた、人々はただ人垣を造つてゐるのみで彼を抱き起してやらうとする者がなかつた、しばらくして其人々を分けて入つ

製材所新設

平町人事

出生

婚姻

死亡

た若い學生は其男を助け起し埃を拂ひ背負ふ様にして附近の山崎屋といふ宿屋までとどけると墓口をたゞいで全部の金を與へ下妻中學の寺田といふ者ですといつただけで逃る様に立ち去る

▲材木町 島田七郎氏長男幸平 ▲白銀町 須藤昌次氏三男三郎 ▲田町 永山眞彦(三) 茨城縣長岡村富永(三) ▲死 亡 ▲白銀町 須藤三郎(三)